

吉井奈々さん



1981年 神奈川県生まれ。トランスセクシュアルGID。「ニューハーフ」の仕事を経て、現在は、エッセイスト、webデザイナー。女性と男性の生き方について考えるグループ「ジェンダー・キャリア・デザイン」の主任研究員も務めている。夫は中学校の同級生。

意識し始めたのは小学校高学年のころ

バレнтаインの話をよく使うのですが、幼稚園のとき、私は気にせず男の子にもプレゼントしてたんですね。そのときは喜んでくれてたのに、小学校高学年になるともらってくれなくなって、それに気づいて、「あー、これじゃだめなんだあ」と思った。

それで、「このままいくと傷つくな」という防衛本能が出たんです。そのころはバブルの絶盛期で、テレビのチャンネルをまわすと、ミスターレディがたくさん出てました。そういう人たちがとても眩しく楽しそうに見えて、「これだー」と思いました。テレビで新宿二丁目、新宿二丁目と言っている時代で、初めていったのが小学校卒業の春休み。初めて二丁目に行ったときに、「あー、こっちだったんだあ、私は」と気づいた。そのときは今みたいに性同一性障害とかいう言葉がなかったので、男として男が好きっていったら、夜の世界にいくしかなかったんですね。

だから、いつからかって言われると、小学校高学年のころですかね。

小さいときは、ガンダムよりリカちゃん人形、シルバニアの森の方が好きで、たぶん親も「なんか他の子とは違うな」と感じてたと思います。中学生になってませてくると、ビジュアル系バンドが流行っていたので、「バンドが好きだからお化粧したい」とか言い訳をしました。

お母さんは、「きつと一過性のことだから」と言っている種放任してくれましたし、お父さんも、男の子だから腕白のほうがいいという感じだったので、夜遊びもできて、いろいろな方々と触れ合えたのがよかったです。学校では、からかわれはしたけど、いじめられてはなかったですね。といつても二丁目について遊んでたので、学校にはほとんどいっていません。

母親に言ったのは17歳のとき

「男の子が好きなんだ」とちゃんと言ったのはしばらく後ですね。私もバレルのがいやで、中学が終わったらずぐ家を出たんです。やっぱり下着とかでバレちゃうじゃない？ いつまでもトランクスとかはいていたくなかったし、かといって女性物の下着を家で洗うわけにいかないから。親は、私が夜働いているのは知ってたけど、びっくりしてましたね。

母親に言ったのは17歳のときかな。来年18歳で手術できる年になるから、去勢手術をしたいと。「笑顔でちゃ

んと年をとって、恋愛もしたいし、自分のためにやることだから悲しまないで」と言って納得してもらいました。でも、「女の子として生んであげられなかったからね」と電話口で泣かれました。

だけど、私はそうじゃなかったからよかったな、とも思うのです。女の子として生まれてたら、経験できなかったことがいっぱいあるし、社会と自分という物の見方をすることもなかったと思います。お母さんは、今でもそういう話をするし、仲良くしています。

お父さんは、最初は大変だったみたい。刻一刻と息子が変わっていくのを目の当たりにして、一時期は「もう帰ってくるな」と言われました。お父さんにちゃんと話したのは、成人式のときかな。ちゃんと振袖で帰って、そのときには見た目も小綺麗になってきていたので、それでようやく「よかったな」と言ってもらいました。だから、あまりがながんカミングアウトしていくほうではなかったですね。

最初に育てられたお店のママが厳しい人で

私が一番最初に育てられたお店のママが厳しい人で、「オカマである前に一人の人間でありなさい」とよく言われました。「私たちが

こういう格好をしているのは、私たちの好き勝手やってることなんだから、それで家族や兄弟や親族に迷惑をかけることは絶対してはいけないよ」と言われ、家族への恩もわきまえずに、ただカミングアウトすればいい

